

# 持続化補助金を活用

山形市内にロボット芝刈機の販売、設計、施工、アフターサービスを行うプロショップがオープンした。「工場や企業、公園、公共施設の緑地を手軽に効率的に管理するお手伝いを」。会議所の小規模事業者持続化補助金で「店の顔」である看板を替え、シヨールームを一新した老舗の農機具・肥料商(株)齋藤商会の新たな挑戦を紹介する。

―農機具商として古い歴史を誇っています。

齋藤源一代表取締役 創業は明治43年(1910)。上山市権現堂で、ふ化したばかりの蚕を養蚕農家に販売する種屋に生まれた齋藤源吉が、山形駅前の旅館村木沢屋(現・山形村木沢ビル)の東隣に店を開きました。

奥羽線が山形まで開通したのが明治34年です。山形市内で農機具商を開いたのはしりでしょう。主に養蚕器具や大正時代に入ってから噴霧器、足踏み脱穀機を販売していました。昭和23年(1948)に会社化し、その後ヤンマー社の特約店として業務を拡張していましたが、山形駅周辺一帯の都市計画整理事業に伴って現在地に移転しました。間もなく50年になります。

―スウェーデン製のロボット芝刈機との出会いは。

齋藤隆裕専務取締役 販売先である農家そのものが減少しており、機械も大型化しています。私どもの規模で事業を継続していくのは難しくなるの間違ひなく、家業を生かす

ながら、時代にあった商品はないかと模索していました。

5年前に千葉県の幕張メッセでハスクバーナ社製のロボット芝刈機「オートモア」に出会いました。取引のあるワイナリーから「ヨーロッパに無人の草刈機がある。購入したいのだが」と相談もあり、「これだ」と直感し、その場で思い切って代理店契約を申し込みました。

ハスクバーナ社は1689年に設立され、スウェーデン王室にライフルの一種・マスケット銃を製造し、その後オートバイやマシンを手掛け、現在は農林・造園機器、建設機械のメーカーとしてストックホルムに本社を置き、世界60カ国以上で製品を販売しています。

同社のロボット芝刈機「オートモア」の特徴を説明します。毎日少しす

つ伸びる前に刈るため、最も大変な作業である集草が不要です。充電が必要になると自動でチャージステーションに戻ります。ワイヤーで囲まれたエリア内をランダムに走行することで、刈り残すことなく、高さが均一の美しい芝生に刈り込むことができます。35°の急斜面でも可能で、24時間毎日稼働させると最大5000平方メートルの芝を一定の高さに保つことができます。

最も大きなメリットは緑地の維持管理費の削減です。チャージステーション、境界ワイヤーの施工費を含めて提供していますが、山形市内の製造工場では年間約600万円の維持管理費を約200万円に抑えることができました。

―看板をはじめ車のディラーを思

わせるような店舗です。

齋藤専務 「新たな事業へ挑戦」の決意を込めて、まず看板を替えようと決断しました。ヤンマー社の理解を得て、ロードに面したメインの看板を、ハスクバーナ社のロゴに変更しました。その際、長年懇意にしていた生花店から「会議所に相談してみてもどうか」とアドバイスを受け、小規模事業者持続化補助金を申請。経営支援課の担当職員の方と一緒に企業概要、事業提案、事業効果など補助事業計画書を作成し、補助金を受けました。さらに、独自に店舗ショールームを改装。芝生のイメージを人工芝で表現し、ウインドーにはキャッチコピーを貼り、プロジェクトを設置して夜間でも興味を引くように工夫。店舗の内外で実演しています。

先日、「ハスクバーナ・オートモアshop」をオープンしました。ロボット芝刈り機全機種、ラジコン草刈機、ジャケット、Tシャツ、バックなどをそろえています。この間、パンフレット制作等多くの方の協力得ました。改装一新したショップを拠点に、これまで取引させていただいたヤンマー社をはじめ、県内の企業と提携し販路を拡大していきたいと思っています。



3月下旬にオープンした「ハスクバーナ・オートモアShop」=山形市やよい



スウェーデン製のロボット芝刈機



35°の傾斜でも楽々走行



大正10年に撮影した山形駅前の「齋藤商会」



齋藤源一代表取締役(左)と4代目の齋藤隆裕専務